

受難週祈祷会奨励

2017.4.12

『きょう、わたしとともに』

ルカの福音書 23章32~42節

和泉聖書教会

牧師 五十嵐 賢志

新約聖書 ルカの福音書 23章32~42節

ほかにも死ふたりの犯罪人が、イエスとともに刑にされるために、引かれて行った。

「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとは右に、ひとは左に。そのとき、イエスはこう言われた。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。

「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」

兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、

「ユダヤ人の王なら、自分を救え」

と言った。「これはユダヤ人の王」と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。

十字架にかけられていた犯罪人のひとはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」

と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。

「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

そして言った。

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思

い出してください。」

イエスは、彼に言われた。

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

梗概

序

- I. 何をしているのかわからない
- II. 救世主観の相違
- III. 弱さを共に

結

序

受難週を共に過ごしております。本来ならば十字架につけられた日に当たる金曜日に開くべき箇所ですが、この週の祈りの日に、十字架のキリストについてのみことばを共に聞いてまいりたいと思います。

1. 何をしているのかわからない

キリストが十字架に架けられる場面で、「ふたりの犯罪人が、イエスとともに」殺されるために引かれてきた、と聖書は語っています。

現代の死刑という制度においては、刑の執行に見せしめという意味合いは薄れてくるようになりました。処刑は一人ひとりです。けれども、今、世界で注目を集めている「イスラム国」などではいわゆる公開処刑ということが行われています。その場合、同じ犯罪人をまとめて、見せしめにして殺すということで人々の恐怖を煽るということをするわけです。思想犯と強盗殺人、保険金殺人などを同時に処刑するということはあまり意味がありません。

こういうところから見るときに、イエスという人がどういう犯罪者として扱われたのかということがわかるでしょう。強盗殺人などの凶悪犯たちと一緒に殺されようとしていたということです。勿論、イエスはそんな犯罪を犯したことも荷担したこともありません。もし仮に犯罪者としてのカテゴリーに入れるのだとすれば、政治犯・思想犯ということになるでしょう。

困みに、イエスの身代わりに一人の男が恩赦を受けて釈放されま

した。この男の名は「バラバ」と言い、19節を見ると「都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた者である」と説明がなされています。この男こそ政治犯です。彼がイエスと共に処刑されるのであれば国家権力に対して反抗する者を見せしめにするという意味となったでしょう。しかし、イエスは、自らの欲望のために犯罪を犯した軽蔑されるべき犯罪者の一人に数えられたのです。

キリストの言われた

「彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」

ということばは、神の子に対してなされた侮辱の意味を、イエスを十字架につけた者たちが全くわかっていないということを行っているのです。しかし、

「どれだけひどいことをしているのか、わかっているのか!」

という相手への抗議のことばではなく、父である神への取りなしの祈りとして語られたのです。

十字架につけるということだけでもひどいことなのに、そこに至るありとあらゆることが屈辱的であるということ、しかもそれをやっている者たちがその意味を理解していなかったのです。

十字架につけられたキリストが「彼らを赦してください」と祈っているすぐそばでこの方の着物をくじ引きにして分けている者たちがいました。着物を分けたということは、つまり裸にされているということで、当時のユダヤでは相当屈辱的なことであったようです。

よってたかって弱い者を面白がって虐めている者たちが、自分たちのしていることがどれだけひどいことなのかわかっていないように、ここに描かれている人たちはみなわかっていないのです。それは読者である私たちについてもまた同様で、わかっていないのだと言えるでしょう。ですから、それらを可能な限り紐解いていく必要がある

のだと思います。

II. 救世主観の相違

私たちが、きょう、特に目を向きたいのは、十字架の周りにいた人々が口々に言っていた

「自分を救え」

ということばです。

それを最初に言ったのは指導的な立場にあった人たちです。

「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ」(35節)

長く信仰生活を送っている人たちは、イエス・キリストが私たちの身代わりに十字架にかかって死んで下さったのだ、と信じていますから、犠牲になって死ぬことで他人を救ったということを理解しています。ですから、「自分を救ってみろ!」という揶揄することばが何を要求しているのか、今ひとつピンとこないのではないのでしょうか。

十字架を取り巻いていた人々が、なぜことさらに「自分を救え」という要求に拘っていたのか。

鍵になることばがあります。

それは「キリスト」です。

私たちには、十字架に架かって死んでよみがえられた神の御子キリストというイメージがあります。けれども、当時の人々にとっては異なるイメージがあったのです。

「キリスト」とは「救世主」という意味です。この世を救う英雄を人々は欲していたので、キリストが神ご自身である必要性は全くな

かったのです。

この時代のユダヤは大きな帝国の支配を受けた植民地でした。バビロン帝国に滅ぼされたイスラエル王国はほとんど独立国家として歩むことなく、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマという強大な帝国に飲み込まれていったのです。ペルシヤから当時の世界を奪い取ってギリシヤ帝国を築いたのがあのアレキサンダー大王です。つまり、支配されていたユダヤ人たちは、あのアレキサンダー大王のような救世主がイスラエルから起こって圧政から救い出してくれるということを期待していたのです。ですから「キリスト」はイコール「ユダヤ人の王」であったのです。

ユダヤ人の指導者らはこう言いました。

「もし、神のキリストで、選ばれた者なら…」

神に選ばれて救世主となったのであれば、逮捕されて、裁判にかけられ、おめおめと処刑されるなんてことがあろうはずがない。彼らは、ある意味、いや当時の人々はすべてイエスという人に救世主であることを期待したのです。ところが、病人や貧しい者たちといつも一緒にいて弱い人々に寄り添っているけれど、いっこうに立ち上がって戦おうとはしない。期待外れであったということです。

私の青春時代に流行っていた漫画に『北斗の拳』というものがありました。核戦争によって文明と人々の秩序が失われ、水と食料といった残された資源をめぐる争いが繰り返されるという最終戦争後の世界が舞台で、貧しい人々に寄り添い守る正義のヒーローが邪悪な者たちと戦い滅ぼしていくというストーリーです。

これがまさに人々の要求する救世主像なのではないでしょうか。ユダヤ人たちの求めていたキリストはこのような存在です。敵を滅ぼして王になる英雄でした。

或いは十字架から颯爽と降りて、敵対する者たちを天の軍勢を呼び寄せて一瞬にして滅ぼし、いよいよ立ち上がるのがもしかすると見られるかもしれないと期待したのです。

こういう「キリスト」という前提を持っていた当時の人々にとっては、自分自身さえ救えない弱々しいキリストなどは考えられなかったのです。そして、そのような救世主を求める人々の心の裏側には、その強さに肖ろうとする思いがあったということです。強さに肖るということは、その人自身も強くなり、勝利して、戦い抜いてつかみ取ろうとすることに他なりません。

けれども、我らのキリストは弱き者たちと共にあり、その弱さを肯定し、決して戦わず、死ぬことによって救う方であったのです。

Ⅲ. 弱さを共に

この方と共に十字架につけられた犯罪人の一人がこう言いました。

「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」

十字架の下にいる罵る人々に影響されてこのひとりの犯罪人もこう言ったのでしょ。何をしているのかわからない人々のことばが、今まさに、キリストの十字架の傍らにまでやってきたのです。彼自身も自分が何を言っているのかわかっていなかったはずで。

しかし、ここでもうひとりの犯罪人が口を開くのです。

「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ」

(41節)

彼は「同じ刑罰を受けている」と言いました。強盗殺人という自らの私利私欲のために犯罪を働いた自分と「同じ刑罰」であると彼は認識したのです。

これまでキリストは、最も貧しい人々と共におられました。病の人たちとと共にあり、伝染すると恐れられた重い皮膚病の人の肌に触れ、精神の錯乱状態にあった人とも共にあり、金の亡者や、体を売って淫らなことをしていた女たちとも共にあり、そして遂に犯罪者として処刑される彼らとも共におられたのです。

キリストの十字架は、徹底的に我らの弱さを受けとめ、徹底的に我らの惨めさと共にあるということであったのです。

そして共におられるキリストを己に感じたこの犯罪人はイエスにこう語るのです。

「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください」

「あなたの御国の位にお着きになるときに」とは、この方が救世主となり、王となるということです。戦って、勝ち抜いて、敵を滅ぼして救世主となり王となるのではなく、徹底して弱さを受けとめ、病を担うことによって人々を救おうとなさっているのだと、彼ははっきりわかったのでしょう。それでも彼は控えめに「私を思い出してください」と言ったのです。こんなに悪いことをしてきたのだから死んで当然、その苦しみを免れ得るものではないと感じたことでしょう。だから、せめて「思い出してください」と言ったのだと思います。

けれども、イエスのことばは思いもよらないものでした。

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」

「パラダイスにいる」というこのことばは、もとのことばでは未来を

表す言い方がなされています。それと共に「きょう」ということばが伴っていますから、きょうから後、将来にわたってすべての日においてキリストと共にあり続けることになる、ということです。パラダイスというところがどういうところなのか、ということよりはむしろこの方と共に生きられるのだということをはほうがより重要です。

結

このことはまた私たちひとり一人のことでもあります。私たちは、この犯罪人の一人を私自身のこととしてみことばを聞いたのです。彼へのことばは私に語られています。つまり、死んで天国に行けるということよりはむしろ、どんな場合にもキリストと共にあり続ける、キリストと共に生き続ける、そういう慰めに入れられているということがより確かなことです。

私たちの人生において地獄を見るような時でさえ、キリストと共にあることによってパラダイスの如く過ごすことができるということです。

徹底的に私の弱さに寄り添い、私の傷みを負ってくださる方が私と共におられるのです。

十字架を我が慰めとして、共に歩もうではありませんか。